

ごあいさつ



公益財団法人 日本テニス協会
会長 畔柳 信雄

実業団テニスの日本一を決めるテニス日本リーグが、今大会で30周年を迎えることとなりました。この節目となる記念大会が盛大に開催されますことを、心よりお慶び申し上げます。

お陰様で30周年を迎えることができましたのも、ひとえに日頃、実業団テニスの活動に暖かいご理解を頂き、その発展にご尽力頂いている各企業の皆様と、ご観戦ご声援を頂いている観客の皆様方のご支援の賜物と、深い敬意を表すると共に厚く感謝申し上げます。

今大会、ここまで勝ち抜き見事に日本リーグ出場を果たされました各社の監督、選手、スタッフの皆様にも心よりお祝い申し上げます。

皆様ご存知の通り、世界の4大大会や国際大会での錦織圭選手をはじめとした日本人選手の活躍により、日本のテニス界は大いに盛り上がりを見せはじめています。私ども日本テニス協会は、「フェアプレー」「チームワーク」「グローバル」を合言葉に、オリンピックをはじめとする、世界レベルで活躍できる選手の強化と育成、そして「TENNIS PLAY & STAY」の推進によるテニス普及活動に力をいれております。

そのなかで、この大会を日本における最高のテニス団体戦とするべく、各企業の皆様方と連携を保ちながら、ご理解とご協力に応えられるよう、さらなる向上に努めて参ります。

日本経済新聞社様には引き続きご支援を頂き、告知記事や試合結果の報道などテニス日本リーグを取り上げて頂けることは、参加企業の皆様にも大いに励みになることと存じます。

参加されます企業の皆様には、この大会を社内の絆を強める良い機会とご理解下さって、多くの応援団を送り込んで大いに盛り上げて頂きたいと思っております。

最後になりましたが、ご後援を頂いております日本経済新聞社様、並びにご協賛を頂いておりますヨネックス株式会社様をはじめ多くの協力会社様、また運営協力を頂いております関係各位に対しまして心から感謝を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

ごあいさつ



公益財団法人 日本テニス協会
実業団委員会

委員長 矢澤 猛

国内最高峰の実業団チーム戦でありますテニス日本リーグが、ひとつの節目となります記念すべき30回目を迎えて本年も盛大に開催出来ることをとても嬉しく思います。

この10年間はプロ選手や外国人選手に関する課題等を乗り越え、当初は順調に運営され始めていましたが、それも束の間、2008年に起きたリーマンショックはテニス日本リーグ参画チームにも多大な影響を与え、部費予算削減、テニス部の減少、テニス部撤退等という事態がとても多く発生いたしました。そのような状況下で、各実業団チームの皆さんや全国の実業団委員の皆さんと共に何とか活性化を取り戻そうと知恵を絞ってきました。そして新たなチーム編成のサポートや女子チームへの補強選手制度、ベスト・アマチュア賞等の策定によって徐々に活性化を図ることが出来てきました。近年は2020年東京オリンピック開催決定や錦織選手の大活躍によってテニスへの関心度が高まり、テニス日本リーグのみならず他の実業団テニス大会もチーム数の増加やテニスレベルの向上が見受けられるようになってまいりました。このように経済状況や生活環境によって大きく左右されやすい実業団テニスの状況ですが、次の10年間への更なる進化を目標に頑張っていきたいと思えます。

10月に広島広域公園テニスコートにて開催しました第29回全国実業団対抗テニストーナメントでは、男子は上位4チーム、初優勝のレック興発、明治安田生命、鹿児島銀行、伊勢久が、女子は上位2チーム、優勝のリコージャパン、キヤノンが素晴らしい熱戦の末、本大会出場権を獲得しました。残留チームも含め本大会出場チーム選手の皆さん、おめでとうございます。12月の1stステージから来年2月の決勝戦まで寒い時期になりますが、体調管理をしっかりと行い、日頃の練習成果を存分に発揮し、日本一のチームを目指して頑張っていたきたいと思います。そして優勝という栄誉と全豪オープン期間中に同会場で開催されるアジアパシフィック・テニス・リーグ(ATL)への出場資格を獲得していただきたいと思えます。

最後になりましたが、長年に渡ってご後援を賜っております日本経済新聞社様、ご協賛頂いておりますヨネックス株式会社様をはじめ、主管いただきます各地域協会、都県協会の皆さま、並びに関係者の皆さまにお礼を申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。